

人体科学会第26回大会・基調講演

2016年12月3日 稲盛記念会館

扇の要としての「医学原論」

京都府立医科大学・名誉教授

棚次正和

大会テーマ 「医学・医療を哲学する —いのちの根源を見据えて—」

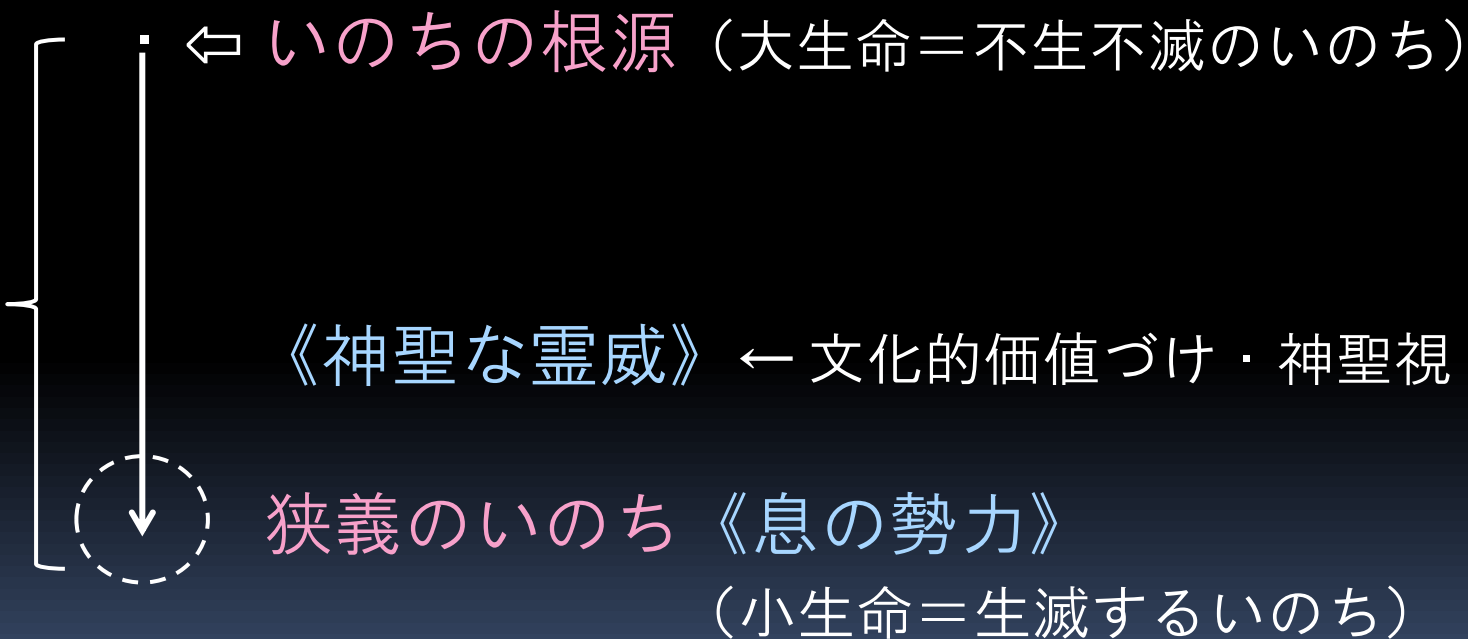
- 本大会の企画・運営の中核を担っているのは、「いのちの医療哲学研究会」。
- 現行の医学・医療が抱えた諸問題を解決すべく、医学・医療を根本原理にまで遡って問い直すことが目的である。

⇒ 澤瀉久敬『医学概論』三部作の議論や問題意識を共有した上で、メンバーそれぞれが医学原論・看護学原論を構築して、それを教育に反映させること目指す。

大会テーマ「医学・医療を哲学する —いのちの根源を見据えて—」

いのち=い（息・斎）+の+ち（勢い）

広義のいのち



1 澤瀉久敬先生の『医学概論』



第60回神宮式年遷宮に奉仕（昭和48年）

澤瀉久敬 先生 (おもだか ひさゆき、1904-1995)

1904年 伊勢市生まれ

1929年 京都帝国大学文学部哲学科卒業、九鬼周造に学ぶ

1935年 フランス政府招聘留学生 ～1937年

1938年 京都帝国大学文学部講師

1941年 大阪帝国大学医学部講師

同大学医学部「医学概論」開講

1948年 大阪大学文学部創設、文学部教授

1968年 大阪大学定年退官、南山大学文学部教授

1986年 日本学士院会員 ～1977年

1-1 なぜ医学概論か



- 医学概論（医学原論）とは、医学教育の要となるもの。扇に譬えると、骨（医学の専門分野、診療科）が次々と増設される中、それらを束ねるところの要が存在しないため、全体として医学がいかなるものか分からないという盲点がある。医学概論は、「扇の要」の役割を担うものである。

『医学概論 第1部 科学について』 創元社, 1945年

『医学概論 第2部 生命について』 創元社, 1949年

『医学概論 第3部 医学について』 東京創元社, 1959年

1-2 『医学概論』の構想

- ◆「概論」とは「**学問自体を原理的に論ずる学問**」のこと。
- ◆「医学概論」は、方法的には医学とは何かを自ら反省し、対象的には具体的事実の奥にある本質を尋ねる「**医学の哲学**」として、医学の諸分科を束ねる「**扇の要**」の役割を果たすもの。
- ◆医学概論の課題は、自然科学を反省し、生命の立場で医学を論じることである。その使命は、「医学の諸分科の統一を考え、医学一般の本質を反省するとともに、進んで医学と人間存在との関係を明らかに」することにある。
- ◆医学概論の講義だけでは不十分であり、**その専門家を養成する講座的機構**が不可欠である。

1-3 『医学概論』 第二部・生命論

身体は「気と体の二元的一元性」である。

- α (気) は

- ①精神ではなく非延長的なはたらきであり、
- ②統一の原理であり、
- ③発動性である。

- β (体) は

- ①延長性、質量性であり
- ②分散性であり、
- ③静止性である。

1 - 4 「二元的一元性」の入れ子構造

- 身体は「気と体の二元的一元性」である。

$$C = \alpha \mathbf{S} \beta$$

- 身体（生物）と環境の二元的一元性

$$C [\alpha \mathbf{S} \beta] \mathbf{S} M_n$$

- 個人と社会の二元的一元性

$$C [\alpha \mathbf{S} \beta] \mathbf{S} M_s$$

体成（空間）と時成（時間）の二元的一元性

生命の自覚の深化

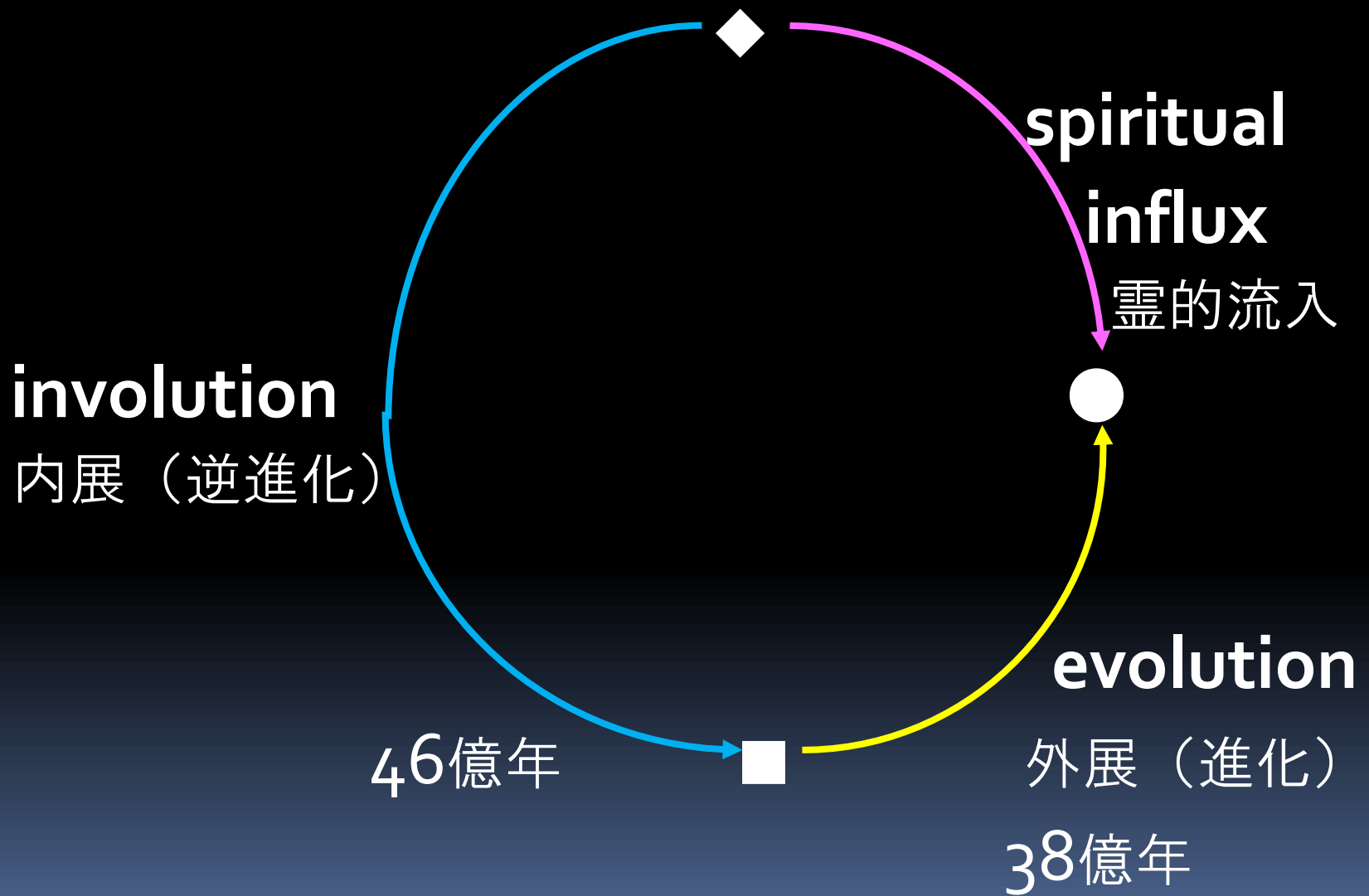
↑
個性化
↑

精神：死の自覚によって「我」となる。「いまだなきものを真に自ら生み出すもの」

意識：植物・動物・人間→自覚的反省的意識

生命：非延長的なはたらき、統一性、発動性

進化（外展）・逆進化（內展）・流入



1-5 基本視座と問題の所在(1)

(1) 生物を「身体」と等値した。

⇒ 下位概念の「体（有機体）」の語法との混乱が生じる。
「身体」よりも「生命体」と呼ぶべきではないか。

(2) 生命を物質的基礎から説明しようとする基本姿勢。

澤瀉の基本視座に潜む最大の問題点と思われる。

物質（無生物）から生命（生物）が説明できるか。

無生物から生物が誕生したとする前提そのものを哲学的洞察と思考
によって厳密に検討すべきではないか。

(3) 精神のはたらきや物質のはたらきを「力」の観点から後付けで説明した。

精神は思惟能力として発動原理を内蔵したはたらきであり、物質も相互外在的な延長の中に内的なはたらきを含んでいるはずである。

基本視座と問題の所在(2)

(4) 精神に固有の尊厳性が、必ずしも十分には説かれていない。物質から生命・意識・精神へと上昇する進化論的な見方に立脚しており、それを逆転させる発想が欠けている。「形而上学的ありがたさ」は、実存の奇跡よりも、形而上学的経験の直観ではないか。

(5) α （氣）の説明が未整理である。

「生命の原理」「空間的对象とはならぬもの」「organisationを可能ならしめる原理」「物質と精神の分裂以前の力」「力における精神的側面」などと規定される。生物と環境に分化する以前の「原始存在」は、上昇する進化運動以前の存在と見られる。

⇒ 上昇する進化運動と逆方向の、根源的なもの（靈性）が現象界へ下降する運動を同時に視野に入れるべきではないか。求められているのは、宗教的叡智と科学的知識との統合である。

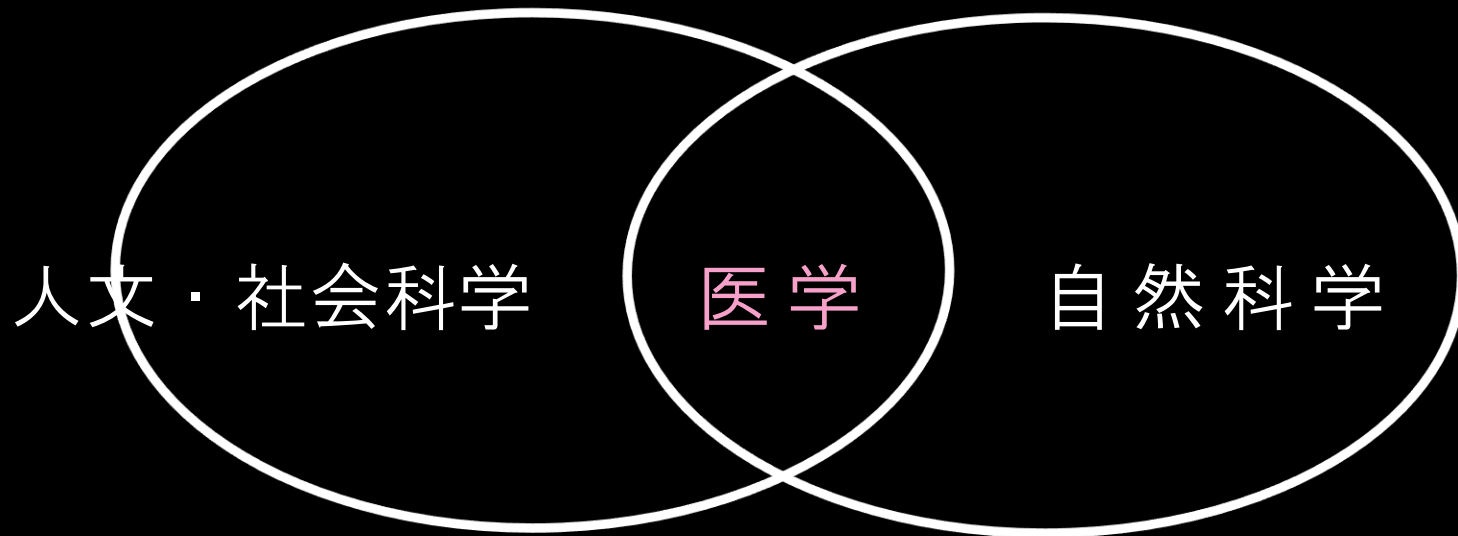


京都府立植物園

2 医学原論の骨子（私案）

- ① 医学は**応用科学（＝第三科学）**に属する。
応用科学とは、基礎学をそれ自身の外に仰いでおり、その基礎学の知見や方法を特定の現実領域に応用するときに生まれる学問である。
（医学、工学、農学、教育学など）
- ② 医学は人間を対象とする限り、**人間学**を基礎学とする。（×自然科学のみでは不十分）
- ③ 人間学は人間存在の諸現象を考察する学であるが、その諸現象は、**精神（意識）現象と身体現象**に大別され、両者間において相互作用が見られる。

应用科学
Applied Sciences



Humanities and Social Sciences

Natural Sciences

④ 人間学は、精神現象を個性記述的に了解する「精神科学（人文諸学と社会科学）」と、身体現象を法則定立的に説明する「自然科学」の双方に跨がった学である。

⑤ 17世紀の科学革命以降、自然科学の考察範囲が次第に収縮して、産む自然（natura naturans）から産まれた自然（natura naturata）へと視点を移し替えた。

【生氣論と機械論の対立の歴史的変奏】

⑥ 医学は、疾病の治療・予防、健康の回復・増進を考究する学であり、理論的解明と実践的応用の両面に関わる。疾病と健康は二者択一の関係ではなく、両者を両極とする一つの連続体と見るべきである。

⑦ 医学の方法は、身体現象に関しては**感覚的知覚に依拠した経験的方法（帰納的な観察と演繹的な実験）**であるが、精神現象に関しては、その他に**感覚的知覚を超えた経験的方法（身体知・暗黙知・無分別知・直観などと呼ばれる人間に内在する能力による）**が求められる。

⑧ 精神現象と身体現象の間には、前者が後者に投影されるという垂直的な異次元間の関係が成り立つ。

⑨ 精神現象の身体現象への投影は、微細な波動（振動数）から粗大な波動（振動数）への次元降下的転写として説明することができる。

⑩ 他方、精神現象と身体現象の水平的（同次元の）な関係については、認識様態と存在様態の関係という観点から捉えることができる。

認識様態〔概念、象徴・心象、感情、感受、感覚〕

五蘊〔識、行、想、受、色〕

五大〔空、風、火、水、地〕

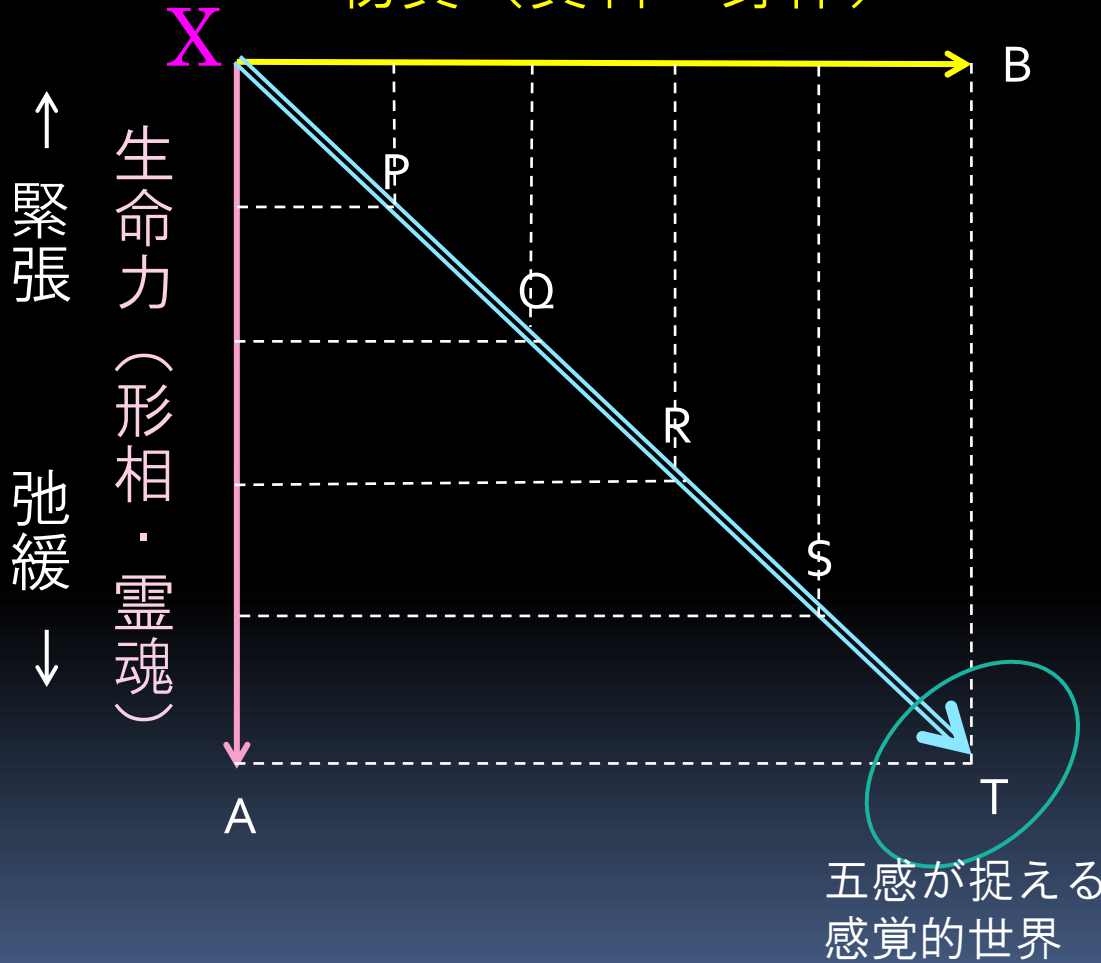
- ① 認識様態と存在様態の不可分な関係が、それぞれの世界で機能的構造的に一定の統一性を獲得するときに、生命体の存在構造（多次元的身体）が成立すると了解される。
- ② 病因は生命体固有の波動（振動数）の歪みにあり、精神現象と身体現象のいずれにも結果（症状）が生じる。その波動の歪みは、生命体の自己内関係、他の生命体との関係、生命体が於いてある自然（世界）との関係の不調和に起因する。（精神的不調、気の滞り、血の汚れなど）
- ③ 病気は生命体自身が波動の歪みを解消しようとする自然な「修復過程」であり、初期症状の多くは、健康回復に向けての自浄作用や好転反応を示す。

⑭ 人間存在は、その核心に「いのちの根源」としての **X** を有する。それは絶対の生命原理であり、叡智と慈愛と意志を有する不可視的な実在である。この **X** 自体は、不生不滅で未顕現であるが、その意図や目的は現象の内に表現される。

⑮ **自然治癒の原理**は、**X** に求められる。それゆえ、疾病治療と健康増進は、現象としての心身関係と **X** との繋がりを再確認して、その繋がりの自覚や再認を深める方向で行なわれるべきである。**X** に人の存在構造の波動を調律して、思考習慣（知情意）と生活習慣（衣食住）を整え直す。

■ 生命体 (生物) = 生命力 + 物質

← 微細 粗大 →
物質 (質料・身体)

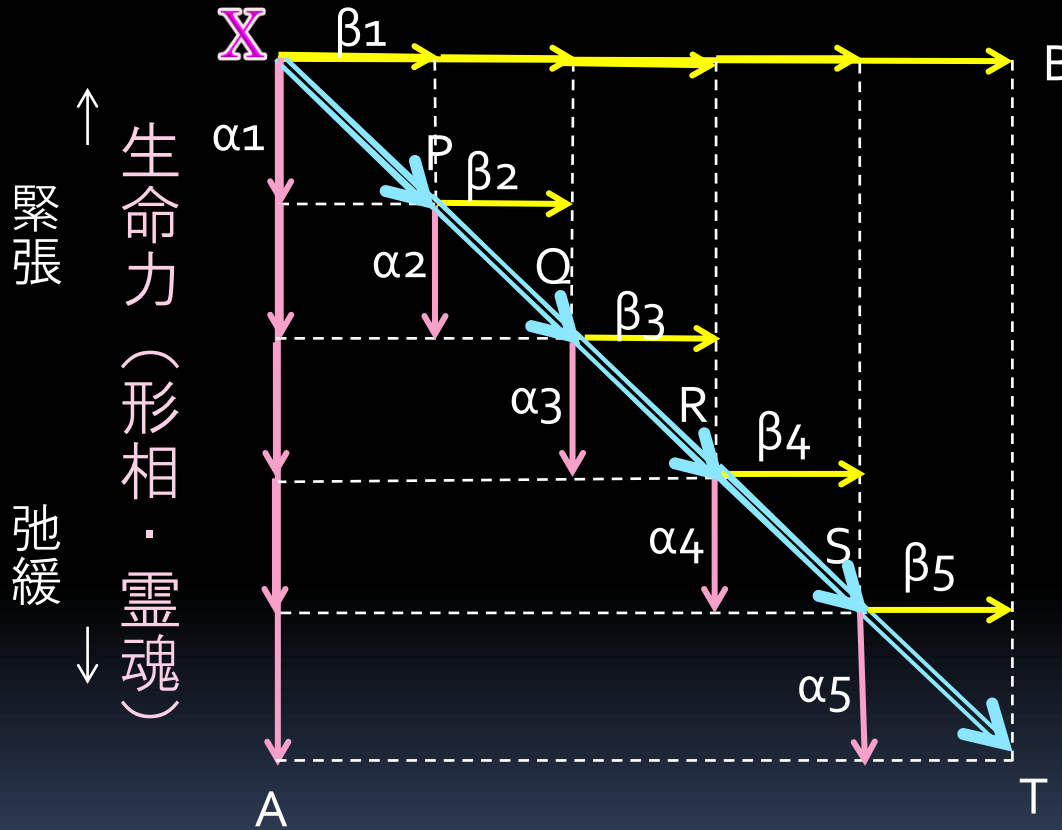


■ 生命体 (生物) = 生命力 + 物質

← 微細 粗大 →

物質 (質料・身体)

生命力 : \overrightarrow{XA}
 物質 : \overrightarrow{XB}
 生命体 : \overrightarrow{XT}



生命体 \overrightarrow{XT} は、 \overrightarrow{XP} 、 \overrightarrow{PQ} 、 \overrightarrow{QR} 、 \overrightarrow{RS} 、 \overrightarrow{ST} という多次元的な重層構造を内蔵する。

澤瀉『医学概論』での α (氣) と β (体) は、主に \overrightarrow{ST} と \overrightarrow{RS} の構成要素と見られる。 α と β は、さらに微細な波動の次元を有すると見られる。



京都御苑



日向大神宮（京の伊勢）

3 未来医学・医療に対する展望

■ 「疾病」概念の再検討

(疾病は自然の「修復過程」である)

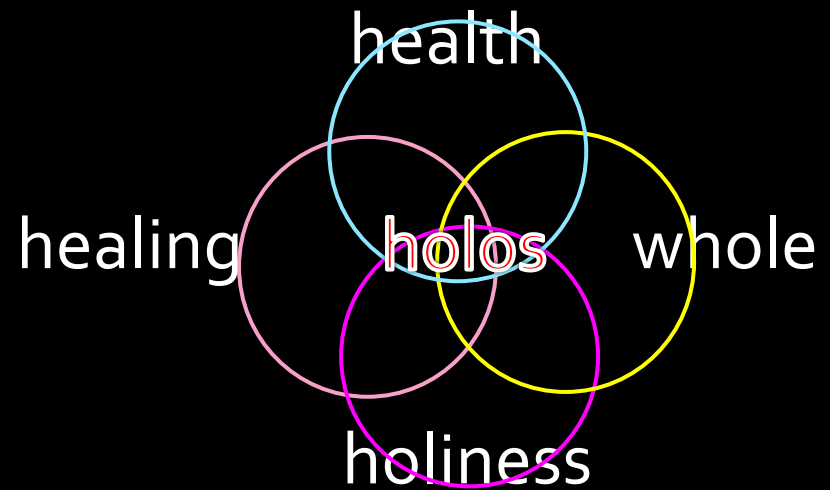
⇒ 疾病が治癒する原理を真正面から問う

■ 「健康」概念の分析

(消極的な健康観では不十分)

⇒ 積極的な健康観、健康＝全体＝治癒＝神聖
健康生成論 (salutogenesis)

- 健康 (health)
- 全体 (whole, holistic)
- 治癒 (healing)
- 神聖 (holiness)



- 「い」 (息・齋) → いのち・いやし・いのり
- 「ひ」 (ひとり、ひとつ)
- 「まこと」 清き明き正しき直き

疾病(disease)

← curing

病気(sickness)

病気生成

← caring

病(illness)

← healing

X

健康(health)

holos

= 健康(health)

= 治癒(healing)

= 全体(whole)

= 神聖(holiness)

健康生成

靈性の自覚

いのちの根源 X

治癒の原理

■ Larry Dossey

非局在医学 (Non-local Medicine)

唯物医学→心身医学→非局在医学

非局在性という、「空間」に拘束されない医学

■ Richard Gerber

波動医学 (Vibrational Medicine)

病因や治療を「波動」の観点から捉える医学

■ 場の医学・医療

人と人の間柄としての「人間（じんかん）」が形成する関係場の変容を基礎に置く医学

非局在医学

波動医学

場の医学

真のホリスティック医学

(Spirit-Mind-Body, 霊心身)

X

地域医療（東洋・西洋・中洋）の違い、
伝統医学と現代医学の対立を超えた、
真の意味でグローバルな医学

ユニヴァーサルな医学



御清聴 ありがとうございます